

令和元年6月27日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02287

研究課題名(和文) 日本近代の渡仏美術家とアイリーン・ 그레이の協働がヨーロッパ美術に与えた影響

研究課題名(英文) Influence of collaboration between Japanese and French artists and Eileen Gray on European art.

研究代表者

川上 比奈子 (Kawakami, Hinako)

摂南大学・理工学部・教授

研究者番号：90535121

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀初頭、アイリーン・ 그레이と協働した渡仏美術家の菅原精造と稲垣吉蔵について調査した結果、彼らは共に東京美術学校において高村光雲に彫刻を学んだことが判明した。また、稲垣は晩年のオーギュスト・ロダンの助手を務めたが、ロダンが菅原の彫刻作品を見たことが切っ掛けであったことが分かった。ヨーロッパの美術家たちが惹きつけられた菅原と稲垣の特性は、高村を招聘した岡倉覚三が主導した東京美術学校の日本美術教育の特性でもあり、その理念と技術が西洋の美術家へ直に伝えられ、その結果、西洋美術へ影響が展開した可能性が大きい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヨーロッパにおいて、菅原と稲垣は「職人」として紹介されてきた。しかし本研究では、菅原も稲垣もいわゆる「職人」ではなく、東京美術学校の総合的な美術教育を受け、高村光雲に学んだ「美術家」であり、ヨーロッパの数々の美術家と共に作品を創り、影響を与えていたことが判明した。20世紀初頭、日本が近代ヨーロッパから学び、影響を受けた指摘は枚挙にいとまがないが、逆に、日本の美術家が近代ヨーロッパの美術に与えた影響を明らかにした研究は極めて少ない。本研究の意義は、日欧美術の影響関係が一方的なものではなく、双方向性の中にあることを具体的に明らかにできたことである。

研究成果の概要(英文)：In the early 20th century, as a result of a survey of the visiting French artists "Seizo Sugawara" and "Kichizo Inagaki" who collaborated with Eileen Gray, it was found that they learned the sculpture from Koun Takamura at Tokyo Fine Arts School. It was also found that Inagaki worked as an assistant of Rodin due to that Rodin looked the sculpture created by Sugawara, The arts of Sugawara and Inagaki attracting European artists strongly inherited the characteristics of Japanese arts education in Tokyo Fine Art School led by Kakuzo Okakura who invited Takamura, and therefore their philosophy and technology can be directly conveyed to Western artists, and as a result it is deduced that their philosophy and technology expanded to the Western artists.

研究分野：美術史

キーワード：アイリーン・ 그레이 菅原精造 稲垣吉蔵 アール・デコ オーギュスト・ロダン ル・コルビュジエ
高村光雲 東京美術学校

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) アイリーン・グレイ (Eileen Gray [1878-1976]) は漆芸家、菅原精造 [1884-1937] から漆芸を学んで協働しアール・デコを代表する装飾芸術家となった。1924年には、オランダの主要美術雑誌『ウェンディンヘン』誌に特集され、デ・スティールのJ.J.P.アウトラから絶賛を受けた。住宅建築の設計へ転じた後も漆塗り屏風の制作に通ずる理念と手法を保ち、屏風の制作手法を適用して住宅、E.1027をデザインした。この住宅は近代建築の巨匠、ル・コルビュジエが称賛し、内部に8枚の壁画を描くほど特別な関心を寄せた傑作として知られる。近年では、2008年、菅原の協力を得て制作されたグレイの漆塗りアームチェアが、オークションで法外な価格で競り落とされ、世界中の注目を集めた。2013年には、パリのポンピドーセンターにおいて大々的な展覧会が開催され、建築作品とともに多数の漆芸作品が展示されたため、日本美術との関連に研究者たちの関心が高まっていた。

(2) 菅原は、1906年ごろグレイに出会い、共同で工房を開設して数々の作品を制作した。その後、徐々に増えた依頼のためにグレイは他の日本人とも一緒に仕事をするようになる。グレイの評伝を著したアダムは、「Sugawaraを通してグレイはパリにいる他の漆職人 Inagaki と Ousouda に出会った...職人と協働することで、彼女の眼が磨かれ、当時好まれていた余分な装飾を取り除く発想の手助けとなった」と述べている。この漆職人とされる日本人を2013年度の科研費により調査した結果、Inagaki は稲垣吉蔵 [1876-1951]、Ousouda は碓田勝巳 [1905-1988] であることが判明していたが、詳細は不明であった。

(3) 1933年、『漆と工芸』誌で片山佳吉が欧州に日本漆芸を伝えグレイに協力する漆芸家として菅原を紹介し、1937年、美術評論家、柳亮が『アトリエ』誌に菅原の活動歴、創作姿勢、グレイとの関係を示したが、グレイとの関係は詳細に記されておらず、その影響関係の探求が望まれていた。1998年、「薩摩治郎八と巴里の日本画家たち」展において森谷美保が菅原の履歴を簡潔に示したが、グレイとの協働については、上記記事と同様である。2013年、ポンピドーセンターにおける「アイリーン・グレイ」展のカタログにおいて、筆者が提供した情報をもとにRuth Starrが菅原に関する論考を示した。また、Cloe Pitiotが稲垣について簡潔にまとめたが、グレイとの協働関係の詳細は示されなかった。それゆえ、欧米のグレイ研究者の間で、日本から渡仏した美術家に対する関心が高まり、日本における調査とその報告が切望されていた。

2. 研究の目的

近代の美術家・建築家として著名なアイリーン・グレイは、漆芸家・菅原精造から漆芸を学び協働してアール・デコを代表する漆塗り作品を生み出した。2013年度からの科研費調査によって調査した結果、当時、渡仏していた彫刻家・稲垣吉蔵と画家・碓田勝巳も、グレイの家具や室内装飾に大いに協力したことが判明した。彼らの協働作品は1924年、オランダの主要美術雑誌『ウェンディンヘン』誌に特集され、欧州の美術家・建築家に影響を与えた。しかし、その協働関係の詳細は明らかではなく、また、彼らの技術と理念がどのように習得したかも詳らかにされていない。一方、近年、グレイの再評価に伴い欧米の研究者たちは、グレイに関わった日本の美術家の情報を切望している。本研究の目的とするところは、上記の美術家たちの史料が散逸する前に、また遺族や関係者が存命のうちに緊急に調査し、日欧美術交流の新たな側面を明らかにすることである。具体的には、渡仏美術家：菅原精造、稲垣吉蔵たちの日本における修行・教育内容を明らかにしつつ、グレイとの協働内容を明らかにし、その協働が欧州の美術に与えた影響とその位置づけを明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 山形県、新潟県、福島県、愛媛県、東京都などに赴き、関連する美術家たちの遺族や関係者にインタビューするとともに史料を収集する。

(2) 国内外で調査・撮影した関連作品、遺された手紙、史料について、作品リスト、データベースを作成する。

(3) 収集した史料のデータベースをもとに、事実の関係性を探り、関連文献と照らし合わせつつ探求し、論文化する。

4. 研究成果



高村光雲に学ぶ菅原精造



高村光雲と映る稲垣吉蔵

(1) 1922年、空間すべてを漆塗り仕上げたグレイのアパルトマン改装は菅原と稲垣が制作し、碓田は少なくとも1929年まではグレイの工房で漆塗りの仕事をしたことが分かっていたが、さらに、詳細に彼らが受けた美術教育の内容を調査した結果、菅原と稲垣は共に東京美術学校において高村光雲(1852-1934)に学んだことが判明した。菅原のフランスの遺族のもとに、高村と菅原が二人で写る写真が遺されており、また、新潟の稲垣の遺族のもとに、稲垣が高村と映る集合写真が遺されていたのである。高村は東京美術学校を始動させた岡倉天心に招聘されて、1889年から東京美術学校に関係し、1890年に彫刻科教授となった。明治草創期の混乱と大変換を経験しつつ、江戸時代までに連綿と受け継がれた木彫の理念・技術を、次の時代に伝える偉業を果たした。

フランスのマルタン夫人のもとに遺されていた写真では、20歳前後の菅原が、左手に箱の上蓋のような立体を持ち、右手には筆のようなものを持っているのがわかる。そして、菅原の横に立って指導しているような人物はこれまで誰なのか定かではなかったが、姿と顔の特徴をほかの写真と照らし合わせると高村光雲と特定できる。この時、おそらく高村は50歳前後、シカゴ万博における著名な木彫作品「老猿」や西郷隆盛像を完成させた後、1900年のパリ万博にも出品し、彫刻家として名実ともに絶頂の時である。マルタン夫人によると、菅原はこの写真を生涯、大事にし続けたという。菅原の墓石に「彫刻家・漆芸家」とあり、彼が漆芸家としてだけでなく彫刻家を自認していた所以であろう。

菅原と稲垣は、東京美術学校において、この巨星から薫陶を受け、日本美術の理念と技術をごく自然に心身に刻み込んだと推察できる。この事実は、菅原と稲垣がグレイに伝えた内容に、日本漆芸だけでなく日本美術における立体造形も含まれることを示している。

改めてグレイの作品を見直すと、高村を招聘した岡倉が1906年に英文で書いた『茶の本』の中で、茶室について重視した日本美術の空間概念「故意に何かを仕立てずにおいて、想像の働きでこれを完成させる」に呼応する特徴があることに気付く。グレイの屏風や住宅建築の中に空白や空隙があえて設けられたデザインが多いからである。江戸時代の日本画家・土佐光起の「白紙ももやうのうちなれば心にてふさぐべし」という言葉にもあるように日本美術には白紙の部分に無を見るのではなく、白紙に何か存在することを描かずして伝える文化がある。反対に西洋ではすべての面を埋めてしまう傾向が大きい。日本美術独自の特質を、東京美術学校と高村から菅原と稲垣は学び、彼らを通してグレイも受け取った可能性が大きいことが明らかとなった。

(2) 本研究の調査を続けるうちに、菅原はアール・デコを代表するスイス出身のジャン・デュナンだけでなくワルシャワ出身のセルジュ・ロヴィンスキーにも教え、フランスの美術に大きな影響を与えたことが判明した。彼らは、菅原がグレイに教えた技術とその作品性に魅かれて、自身の作品を生み出し始めたのである。また、稲垣は晩年のオーギュスト・ロダンを助け、数々の彫刻台座や浅浮彫の枠を制作したが、そのきっかけは、1912年12月、ロダンがパリの骨董店で菅原による装飾のない簡潔な漆塗り木彫に惹きつけられ仕事を依頼した際、稲垣が菅原の代わりにロダンの助手を務めたことに始まることが分かった。つまり、菅原も稲垣も日本で学んだことを西洋の美術家に伝えることに努め、その影響を受けた美術家たちは独自の創作活動を展開したと考えられる。

これまで、グレイをはじめとするヨーロッパの美術家に関係した日本人は「職人」として扱われてきた。例えば、『ジャポニズム 1854年から1910年にかけてのフランス美術に対する日本の影響』

において、アイデルバーグとジョンストンは「フランスの人々が作品だけでなくそれを作る日本の職人とじかに接するチャンスが増えていったこと」を強調したが、この中で日本人はあくまでも「職人」とされており、日本美術を学んだ「美術家」として扱われてはいない。しかし、菅原も稲垣もいわゆる「職人」ではなく、漆工、彫刻、日本画、図案、美学、美術史など、岡倉天心とフェノロサが日本美術の伝統を保ちながら西洋の美術を取り入れようとして主導した東京美術学校の総合的な美術教育を受けていた。決して「職人」ではなく東京美術学校で学んだれっきとした「美術家」であった。特に、二人とも高村光雲に彫刻を学んでいた事実が判明したことは極めて重要である。

(3)高村は岡倉から、江戸までの日本美術を守るために高村自身が彫刻に取り組む姿を直に学生に見せて伝えるよう依頼され、東京美術学校に招聘された彫刻家である。グレイ、ロダン、デュナン、ロヴィンスキーが惹きつけられた菅原と稲垣の特性は、彼らの技量だけでなく、彼らが東京美術学校と高村を通して身につけた日本美術の粋ではないかと筆者は考える。

菅原や稲垣は、西欧の美術家と作業空間を共有しながら材料や道具の扱い方、図案や立体構成の考え方、作品制作の方法についてそのプロセスを直に伝えつつ、彫刻、漆芸を共に創るというリアルな体験によって、技だけでなく日本美術の神髄をヨーロッパの美術家たちに伝えたのではないだろうか。「職人」ではなく「美術家」としての日本人が制作プロセスを通して日本美術を伝えたという視点はこれまで抜け落ちていたように思われる。彼らが獲得していた日本美術の特質や制作プロセスが、西洋の美術家へ直に伝えられることによって彼らの作品に反映し、また、時間を経てその影響が様々な展開した可能性が大きいことが分かった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

川上比奈子、「アイリーン・グレイの家具・インテリア・建築デザインの謎 ル・コルビュジエ、そして菅原精造との影響関係を通して」、生活美学研究紀要、招待論文、2018、67-97

川上比奈子、「漆芸家、菅原精造がアイリーン・グレイの家具・インテリア・建築に及ぼした影響」、デザイン史学、デザイン史学研究会誌、招待論文、15号、2017、104-129

H.Kawakami, "Japanese Lacquer Artist, Seizo Sugawara: His influence on Eileen Gray and Her Furniture, Interior Decoration, and Architecture", Design History, Vol. 15, 2017, pp. 157-190 なお、は の英語版である。

川上比奈子、「アイリーン・グレイが学んだ菅原精造の日本漆芸の背景」、デザイン学研究、日本デザイン学会誌、査読有、63巻、6号、2017、67-74

DOI:10.11247/jssdj.63.6_57

〔学会発表〕(計2件)

川上比奈子、招待講演「アイリーン・グレイのデザインにおける日本的なるもの 菅原精造、稲垣吉蔵など渡仏美術家たちを通して-」、インテリアデザイナー協会60周年記念デザインリフレクション、インテリア&デザインセミナー、公益財団法人インテリアデザイナー協会、2018年10月13日

川上比奈子、招待講演「アイリーン・グレイの家具・インテリア・建築デザインの謎 ル・コルビュジエ、そして菅原精造との影響関係を通して」、生活デザイン研究会、武庫川女子大学、2018年1月20日

〔図書〕(計1件)

川上比奈子他、彰国社、「アイリーン・グレイ ヒンジ的なるものによる模様のうちなる白紙」『モダニスト再考 海外編』、2016、100-115

〔その他〕

2017年度日本デザイン学会年間論文賞 受賞